

黒谷で館跡を確認

町教委が埋蔵文化財調査

耕作地のほ場整備計画がある黒谷と上福井の埋蔵文化財調査が平成20年7月から10月までおこなわれ、黒谷では館跡が確認されました。調査に携わった町教育委員会の渡部賢史学芸員に調査の概要について報告してもらいました。また、小林七十蒔でおこなわれた遺跡調査についても報告してもらいました。

耕作地のほ場整備計画がある黒谷と上福井の埋蔵文化財調査が平成20年7月から10月までおこなわれ、黒谷では館跡が確認されました。調査に携わった町教育委員会の渡部賢史学芸員に調査の概要について報告してもらいました。また、小林七十蒔でおこなわれた遺跡調査についても報告してもらいました。

調査の概要

朝日地区センターの西側の黒谷字館・井戸尻地区と上福井字仲田・三日町地区のほ場整備計画があり、その付近に遺跡があることから、平成20年7月末より調査を実施しました。上福井地区は荒井館跡（上福井は昔、荒井村という名称であった）、黒谷地区には黒谷館跡があったと古文書などから言われています。

館跡とは、貴族や官人などが住んでいた場所または、丘陵などを利用して作った砦という意

味があります（館Ⅱたて、たち、やかた、とも読むことができました）。

上福井地区では、遺構（柱などの跡）や遺物（土器など）は発見できませんでした。調査を実施した場所は、地面を掘ったところ大量の石や砂利が出てきて、伊南川の氾濫源だったと考えられます。現在の伊南川は、河川の流れがかなり変わっていると考えられます。

黒谷地区においては現在の字名からも想像できませんが、館跡があったと考えられます。ほ場整備に係る調査を実施したところ、23トレンチ（トレンチⅡ試掘穴）から、館跡に伴うと考えられる堀跡を確認しました。堀跡の幅は推定360cm、現在の耕作土から深さ150cmで、かなり大きめの堀跡でした。

また、堀跡を発見したことから、朝日地区センターのゲートボール場を調査したところ、ピット（柱跡）222基、土抗

（どこうⅡ柱跡より大きめの穴）、溝跡7条などを確認しました。朝日地区センターの周辺は、保育所や小学校などが建てられていたため、何も出ないかと思っていたところ、多数の痕跡が発見されました。

古文書に残る

荒井館跡と黒谷館跡

荒井跡は新編会津風土記（1809年に会津藩が編纂した古文書）にこう記述されています。

「上荒井村館跡二 一ハ勝蔵山ニアリ、二町四方計土居ノ形僅カニ存ス、一ハ上荒井村ノ西三町余リニアリ、東西二十五間・南北三十間共ニ何人ノ住セシコトヲ知ス」となっています。

一つは勝蔵山にあり、面積が約2万㎡で館跡の形跡がわずかに残っている、もう一つは上荒井村の西に約300mのところがあり、東西約45m、南北約54mの大きさで誰が住んでいたかわからないことが書かれています。

す。

黒谷館跡は、同じ新編会津風土記に「村ヨリ子丑の方一町ニアリ、東西二十五間、南北四十間、何ノ頃ニカ山内兵庫某住セシト云」となっています。

黒谷村から北東方向約1000mにあり、東西約45m、南北72mで山内兵庫が住んでいたことが書かれています。

黒谷館跡に住んでいたとされる山内兵庫について

山内兵庫という人物についての新編会津風土記を調べると、

黒谷村の条 「竜泉寺 真言宗巖風山ト号ス、高野山遍照光院ノ末寺ナリ、何頃ニカ山内兵庫某ト云者此村ニ住セシ時、祈願ノタメ建立セシト云」と記されており、年代は不明ですが、山内兵庫が黒谷村に住んだ時、祈願のため建てたとなっている。

また、旧事雑考（1920年に刊行された史書）には、「密



渡部賢史学芸員

侶智慶住干伊北郷黒谷村龍泉寺、村主山内兵庫祈願師也」と記されており、村主の山内兵庫が黒谷村の龍泉寺を建てたことが書かれています。山内兵庫は、会津四家の山内氏の一族であることは間違いないと思いますが、詳細は不明です。

発掘調査から推測できる

黒谷館跡

23トレンチから堀跡、地区センター前のゲートボール場からの痕跡を見ると、建物跡がいくつもの時期にわたって建てられていたことが考えられます。また、出土した土器などの中に、青磁（中国からの輸入した器）が出土したことや寺を祈願のために建立していることから、権力を持った人物が住んでいたことがわかります。黒谷村の館という字名の場所は代々村の地頭や村主が住んでいた場所と考えられます。

最後に、時代についてですが、



朝日地区センター前全景



出土した青磁片



出土したかわらけ(素焼きの皿)



出土した宋銭、祥符元寶

出土した土器から推測すると14世紀前半～15世紀前半(1301～1450年)の遺跡であると考えられますが、塔寺異本長帳と呼ばれる古文書には、「大永四年(1524)七月の条 同21日山内俊清臣黒谷村 地頭山内兵庫介 父子三人討死 某叛ヲ企ニ横田・高根沢押寄テ誅ス、ココニ至リ子孫断絶」と記されており、1524年に山内兵庫が謀反を起こし、子孫断絶とあることから、館跡の廃絶が推測されます。土器年代とは約100年近くのズレが生じています。

ます。

今回の発見された土器などは、記録に残っている山内兵庫以前の人物が使用していたものの可能性が高いです。また、黒谷村の歴史は今から500年以上前からあることがわかり、地主が住んでいるということはそれなりの黒谷地区の村が古来より形成されていたと考えられます。

七十苅遺跡の調査

11月、小林区七十苅遺跡の隣接地区の河川改修工事のため南会津建設事務所から町教育委員会に遺跡調査の依頼がありました。

七十苅遺跡は、弥生土器が出土した遺跡として只見町史に記載されています。発見された土器には、粃殻の跡が残っておりその土器の時代には只見町でも稲作が行われていたことがわかります。

発掘調査を実施したところ1トレンチ3トレンチより弥生土器を発見しました。土器がまとまって出てきているところがあり、1個ないし2個の土器になると思われます。残念ながら今回の調査では、弥生時代の住居跡などの確認はされませんでした。小林区の七十苅に弥生時代(約2500年前)に人が住んでいたことは確実であろう。

埋蔵文化財を なぜ調査するのか

一度破壊されてしまったら永遠になくなってしまいます。から、文化財保護法という法律で開発が伴う場所に埋蔵文化財があった場合や、隣接地区を開発する場合は、必ず調査を実施しなくてはならないことが決まっています。



七十苅遺跡土器・石器出土状況